百合子賞　正賞　受賞作品

ひまわり

郡山第二中学校

きっかけは母の一言だった。

「楓子、あなたこういうのに行ってみたらいいんじゃない？」

夕食中に母が見せてきたのは、見覚えのない一枚のプリント。

「特別支援学級との、交流会？」

この人はいつもどこからこんなものを見つけてくるのだろう。私が小さく吐いた溜息に母は気付かない。

「そう。楓子は部活も終わったし、ちょうどいいんじゃないかと思って。もうすぐ夏休みだし、良い経験になると思うわよ。」

にっこりと微笑む母にうんざりした。

「お母さん、私だって一応受験生なんだよ。夏休みはみっちり勉強しないといけないの。ただでさえ私は頭の出来が良くないんだから。」

「いいじゃない。まさか一日中勉強するわけでもあるまいし。社会を知ることは、勉強以上に大切なことよ。」

まるで真っ白なティーシャツに一滴の墨汁を垂らされたような気分になる。イライラして、わざと音をたてて食器をテーブルに置く。

こうなってしまったら、もう母は止められない。そう、母はこういう人間なのだ。普段は控えめなくせに、私のこととなると驚くほど強引になる。それは全て母の深い愛情ゆえの過度な期待の表れなのだ。そう分かっているから、私は母の期待通りの娘を演じようと努力する。きっとそれが女手一つで私を育ててくれた母への恩返しだと思うから。

例えば、こんな風に私に慈善活動を強く勧めるのは昔からよくあることだ。外国の恵まれない子供たちへの募金、ペットボトルキャップ集め、地域で行われる資源回収の手伝いなどこれまでにもいろいろなことをしてきた。でもそれは、間違っても世の中の人のためなんかじゃない。私は知っている。母は自分の娘にできた人間であってほしいのだ。その証拠に母は私がそういう活動に参加したとき「どうだった？」とか「大変だったでしょう」とか、「お疲れさま」とさえ言ったことがない。直接聞いたことはないけれど、きっと母は活動の内容になんてちっとも興味がないのだと思う。ただ、娘の出来の良さを周囲に、そして自分自身に知らしめたいだけなのだ。

結局、いつも通り母に押し切られ、私は次の土曜に行われるそのボランティア活動に参加することになった。いつもの流れだ、と内心溜息を吐くが、諦めることには耐性がついている。でもだからといって、そのことに全く抵抗がないかといわれると、それは違う。私だって自分の意見を無視されれば腹が立つし、泣きたくもなる。そして恐らく、母もそんな私の反感に気付いているように思う。でもお互い口には出さない。私たちには常に越えてはいけない一線があって、表面の穏やかさや静けさの奥にはいつ露呈するともしれない不安定さをもっている。

暗くて重たい気持ちを抱えて入った布団はひんやりと冷たかった。

私は一体、何にイライラしているのだろう。私の意思など意に介さない強引な母にか？私の出来の良さを周囲に知らしめるための偽善のような社会活動にか？いや違う。私が嫌いなのは自分をうまく表現できない

自分自身だ。そして、母の思惑通りに周囲から発せられる「中学生なのに偉いね」「すごいね」「立派だね」そんな無意味な賛辞に満足してしまう自分自身なのだ。

目を閉じて耳をすますと、網戸の向こうではぽつんぽつんと雨だれが滴る音が聞こえた。

楽しみなことはなかなか来ないのに嫌なことはすぐに来る、と聞いたことがあるけれどまさにその通りだと思う。交流会の日はすぐにやってきた。

その日は朝からじりじりと日差しの照りつける暑い日だった。七日間しか生きられないという蝉がまるで自らの命を削るようにやかましく鳴いていた。夏休みの間も誰かがきちんと手入れをしているのだろうか、花壇には水滴のついたひまわりが真っすぐに咲き誇っていて、でもそれは私を余計にいらだたせるだけだった。

さっさと受付を済ませ、渡された「ふうこ」と平仮名で記された名札を制服に付ける。そして私は、会場である小学校の体育館に足を踏み入れた。

そこは人で溢れかえっていた。参加の対象になっているのは小学生から高校生とわりと広い範囲の人だから、私の腰くらいまでしかない女の子からクラスの男子とは比べものにならないくらい大人びた男の人まで、本当にいろんな人がいる。特別支援学級の人もボランティアの人も、パッと見じゃ分からない。どうやらそれぞれが好きなように集まって、喋ったり戯れたりしているみたいだ。

「あなた、もしかして初参加の人？」

困惑が顔に出てしまっていたのだろうか。この近くの高校の制服を着た女の人が話かけてきてくれた。

「はい。こういうの、あまり経験したことがなくて、どうしたらいいのか…。」

「そうよね。初めてだといろいろ不安よね。あたしも一回目のときはそうだったな。だけど慣れると楽しいのよ。みんな明るいし、にぎやかな人ばっかりだし。」

確かにそうだった。私はもっと暗い病院のようなところを想像していたのだけど、周りを見るとなんというか、和気あいあいとしている。

「あなた中学生よね。何年生？」

「三年生ですけど、それが」

どうかしました？と言おうとした言葉は何かを見つけたらしい目の前の彼女によって見事に遮られた。

「ちょっと直ー！こっちおいでー！」

なお、とは誰のことだろうか。そういえばこの人の名前も知らないし、私も自己紹介していない。これでは礼儀のなっていない子だと思われたかもしれないと一瞬焦ったが、大声で誰かを呼んでいる彼女は、そんなこと全く気にしていなさそうだ。ほっと胸をなでおろす。

「駄目だ、聞こえてない。ごめんね。ちょっと行ってくる。えっとあなたは、」

そこで彼女はちらりと私の胸に付けられた名札を確認した。なるほどそのための名札なのか、と今更理解する。

「ふうこちゃん。悪いんだけどちょっとそこの壁際で待っててくれるかな。会わせたい子がいるんだよね。」

「あ、はい。大丈夫です。」

そう言うと名札に大きく「まお」と書かれた彼女は人の波の中に紛れていった。

元気なまおさんがいなくなって独りになったら、自己嫌悪に息が詰まりそうになった。なんでもっとうまく立ち回れないんだろう。自己紹介

なんて初対面の人にするのは当たり前だし、あんな入り口で立ち止まっていたら他の人の邪魔になってしまう。そしてまおさんにも気を遣わせてしまった。申し訳なさと不甲斐ない自分への情けなさが緊張で冷えた指先にじんわりと広がっていく。私は母のいう「できた人間」じゃない。何をするにも不器用で自信がない。そしてまた私は、自分が嫌いになっていく。母の期待に応えなければと思えば思うほど、私は負の連鎖に陥ってしまう。

「待たせてごめんね。ふうこちゃん。」

名前を呼ばれ、顔を上げると、そこにはまおさんともう一人の女の子がいた。私と同じくらいの年だろうか。セーラー服を着た長い髪のその子も強張った笑みを浮かべている。

「遅くなっちゃったけど、あたしは真山真央。よろしくね。それで、この子はあたしの妹の直。人見知りなんだけどふうこちゃんと同じ中三だから、仲良くしてやってくれると嬉しいな。」

屈託なく笑う真央さんにこちらまでつられて笑ってしまった。自己紹介をしようと口を開いたそのとき、

「笑ってた方が可愛いよ、ふうこちゃん。」

小さな声だった。でもそれは確かに目の前にいる直さんから発せられた声だった。

「それ今あたしが言おうとしたのにー。完全に直と思考回路一緒だったわ。あたしもふうこちゃんは笑ってた方がいいと思ったよ。」

そんなことを言われたのは初めてだ。でも確かに、今まで無表情で感じが悪かったかもしれない。これじゃあ自分の意思で来たわけではありませんと明言しているようなものだ。それでは真央さんにも直さんにも失礼だ。気を取り直してもう一度、二人を見つめた。

「私は風見楓子です。初参加で分からないことばかりなんですけど、よろしくお願いします。」

お互いの自己紹介が終わってしばらくは三人で他愛のないことを喋っていたのだけれど、少しすると、どうやらこのイベントの常連らしい真央さんは何人かの小学生に連れられて行ってしまった。

「人気者なんだね、真央さん。」

「うん。お姉ちゃんはね、昔からああいうの得意なんだよね。社交的で人と関わるのが好きな人なんだよ。」

直さんは眩しそうに真央さんを見つめていた。

私たちは急速に打ち解けていった。好きな本のこと、将来の夢のこと、今悩んでいること。いろいろなことを話した。私たちはとてもよく似ていて、だから彼女と一緒にいることはとても心地よかった。

お互いの家族の話になったとき、私は直に母のことを打ち明けた。誰にも話せなかった悩みを、今日初めて会った直に伝えられたことが不思議だった。私にとって、自分の気持ちは心の中に隠しておくべきものだったから。でも、一生懸命に話した。本当は今日ここに来たくなかったことも、全部。直はそっか、と優しく笑った。

「きっと楓子は気を遣いすぎなんだよ。家族なんだから、思ったことは正直に言っていいんだよ。心配しなくても、お母さんはそれで楓子のこと嫌いになったりしないよ。」

そう言った直の目はずっと遠くを見ているような、そんな気がした。

交流会が終わり、解散するとき、またねと手を振った私に直は、

「次もまた来る？」

と聞いてきた。次、というのはこれから一週間後に開かれる第二回目の交流会のことだ。このイベントは計四回に分けて行われる。

「うん。また来るね。今日、直に会えて良かった。私、お母さんのこと頑張ってみるよ。」

その日、私は一つの決意をもって会場を後にした。ふと空を見上げれば、大きな夕日が橙色の足跡を残して遠くの山の向こうに沈んでいくと

ころだった。

私が作戦を実行に移したのは、それから六日後のことだった。私の母は働いていて、普段平日は夜八時頃に帰ってくる。しかし、その日の帰りはいつもより一時間以上も早かった。そして何より、仕事が上手くいっているのか、母の機嫌がすこぶる良かったのである。

「お母さん、ちょっと話したいことがあるんだけど。」

お風呂上がりにそう切り出してみると、

「なあに。何かいいことでもあったの？」

と、予想通り軽い言葉が返ってきた。

「あのね、私、将来なりたいものがあるの。」

慎重に言葉を選んで、真剣さが伝わるような声色で話し出す。

「私ね、本当は昔からずっと保育士になりたいと思ってたの。小さな頃お世話になった保育園で働いてた先生がいたじゃない？それを見て、格好いいなって、私もあんな風に一生懸命で温かい大人になれたらいいなって思ったの。だから私、保育士になりたい。」

こんな風に自分の意見を母にぶつけたのは初めてだった。だから、伝わると思った。直に私の気持ちを届けられたように、正直に真っすぐに言葉を紡げばきっと母も分かってくれるはずだと、そう思っていた。でも、

「駄目よ。」

振り返った母の顔は、今まで見た中で一番温度のない、鋭い顔をしていた。暗い海の底のような目に小さく息をのむ。

「なりたいっていえばなれるわけじゃないっていうのはあなたもよく分かってるわよね。でもね、それだけじゃないの。第一、保育士の年収がいくらだか、あなた知ってるの？仕事をする一番の目的は、まず生きることよ。お母さんだって、お父さんと離婚してからあなたを育てるのにどれだけ苦労してきたことか。」

途切れることなく返される正論に、私の心臓が握りしめられた。あまりに直接的な痛みに目頭が熱を帯びる。私の希望なんて、母の前では大河に投げ込まれた小石のようなものなのだ。小石は一瞬音をたてて水面を乱すだけで、大河はすぐにまた元の流れを取り戻す。絶対的かつ強固な母になんてきっと勝てやしないんだ。

「あのね。楓子。お母さんだって本当は楓子の夢を応援してあげたい。だけど、これはあなたを思ってのことなの。お母さんみたいな苦労を楓子にはさせたくないから、どうしても安定した職業に就かせてあげたいの。」

ここまで続けて母は初めて息をついた。

「分かってくれるかしら？」

半強制的な命令に形だけの選択の余地を与える修辞的な問いかけ。私は何も言えなくなって、ただうなずくことしかできなかった。

私には父がいない。私がうんと小さいときに両親が離婚したからだ。だから、私は父のことをほとんど憶えていない。そんな私を女手一つでここまで育ててくれたのは、他でもない母だ。一人で二人分働き、二人分の愛情を注いでくれた母に、私は深い尊敬と感謝を感じている。それから遠慮とわずかな恐怖も。母は強い人だ。そしてその反動のように私は軟弱な人間だ。強い母と弱い私。だから、私たちの間にはいつも家族というより、主従関係のような何かがそこに成り立っていた。その圧倒的な上下関係のようなものから、私も母もいつまでも抜け出せないままだ。

もう寝なさい、という階下からの母の声に従って私は部屋の明かりを消した。

静寂を楽しむかのように、虫たちの声だけが響いていた。

「それで？楓子は何も言い返さずに終わっちゃったの？」

次の日、私は例の交流会に来ていた。

目の前には興味津々瞳を輝かせる直。

「うん。お母さんの言い分も確かにその通りだなって思ったし。やっぱり私には保育士より収入の安定してる公務員の方がいいのかなって。」

「駄目だよ、そんなの。楓子にとって保育士ってそんな簡単に諦められちゃうようなものだったの？」

「うーん、そういうわけじゃないんだけど、何ていうかその…。」

「楓子の意気地なし。あたし、楓子にならできるって思ってたのに。」

そう言い放った直に私は少しイラッとする。

「直には分かんないよ。私の気持ちはきっと私にしか分かんない。」

直は一瞬だけ悲しげな表情になった。まるで信じていた人に裏切られたかのように。そして深い溜息を吐いて、

「当たり前でしょ。だってあたしと楓子は別々の人間なんだから。」

「だけど私はお母さんにそう言われると、どうしても期待に応えなくちゃいけないと思うの。例えばそれが自分の本心じゃなかったとしても。」

「馬鹿みたい。自分の人生は自分のものなのに、どうしてそんなに人任せにするの。あたしが楓子だったら自分のことは自分で決める。」

会ったのはまだ二回目なのに、私たちはもうお互いに遠慮することはなくなっていた。二人の間には、昔からの親友のような雰囲気が流れていた。

「なんで！期待されたら応えなきゃって思うのが普通でしょ⁉なんで直には分からないの？」

「分からないよ！そんな期待されたことなんてないから、あたしには全然理解できないに決まってるじゃん！」

誰もが明るく笑い合う心地よい空間の中で言い争いをする私たちは明らかに浮いていた。でも、そんなことを気にする余裕がないくらい私と直は興奮していた。言いたいことが相手に伝わらないもどかしさをお互いにはっきりと感じ取っていた。

澱んだ空気が広がる。呼吸が心なしか苦しくなる。ちっとも動かない堂々巡りにうんざりして、思わず私は呟いた。

「なんでお母さんは私なんかに期待するんだろう。私にはそんな価値なんてないのに。」

今思うと、このときの私は正常じゃなかったんだと思う。言っていいことと悪いことの判断すらできずに、あっさりと口走った私は軽率だったとしか言いようがない。

私がそう言った後、直の顔色はみるみる真っ白になった。真っ青、と表現するのかもしれないけれど、とにかく白かった。大きな瞳に涙を溜めて、彼女は静かに、そして怒りに燃えていた。

「いいよね、楓子は。お母さんから期待してもらえるだけ恵まれてるんだから。」

直は冷静だった。怖いくらいに落ち着いていた。

「あたしの家族はそんなこと言ってくれない。直の好きなようにしたらいいよって、そればっかり。」

そう言うと直は長い髪を耳にかけた。普段は隠されているその右耳に付いていたのは、

「…補聴器？」

それは小さくて透明な、機械のようなものだった。でも、それはどんなに小さくても、目立たないようにされていても、確かにその存在を主

張していた。それが、直と私の違いだった。このイベントに参加している理由。必要最小限しか人と関わらないわけ。
「あたしにはハンデがあるから、みんなそう言うの。周りから見たら気付かないくらいのことなのに、あの人たちが気にするから、それが余計にあたしをみじめにさせるの。楓子だってあたしが見せるまで分からなかったでしょう？」
真っ赤になった瞳は、真っすぐに私を射抜いていた。「直」という名前通りその強い目は大きな悲しみに満ちてなお、私からそらされることはなかった。
「あたしが欲しいものをたくさん持ってるくせに、それがいらないみたいな顔をしてる人ってすごく嫌だ。それなら、あたしにちょうだいよ。」
最後の言葉は可哀そうなくらい震えていた。申し訳なさと自分への怒りで頭がいっぱいになる。
「ごめん、直。私、」
「そんな目で見ないでよ。あたし、可哀そうだなんて思われたくない。あたしなんかより、自分が恵まれてることに気付けない楓子の方がよっぽど可哀そうだよ。」
そう言い捨てて、直は走って会場から出ていってしまった。追いかけることなんてできなかった。彼女を傷つけた私にはそんな資格がないと思った。そうやって直の後ろ姿をぼんやりと見つめたとき、私は初めて彼女の背中がとても小さいことに気が付いた。
直はハンディキャップなんて持っていない。目には見えないけれど、自分でハンディキャップをつくってとらわれていたのは私の方だった。

そしてその次の週、第三回目の交流会の会場に、直の姿はなかった。私は、本来なら直のいるはずだったスペースを見つめては淋しそうに溜め息を吐く真央さんに気が付いた。
「ごめんなさい…。」
真央さんにも直にも届くはずはないのに、私は小さな声で呟いた。

私は考えた。自分はどうしたらいいのか。あるいは、どうしたいのか。これまで母の操り人形だった私にとってそれはとても難しいことで、同時に疲れることでもあった。たくさん悩み、苦しんだ。でもそれは直のせいなんかじゃなくて、いずれ向き合わなければならない、私の本質的な問題だった。遅かれ早かれ、私はきっとこの壁にぶつかることになっていたのだと思う。
そして私は、生まれて初めて自分の意志で立ち上がる。
「お母さん、お願いがあるの。」
わがままかもしれない。呆れられてしまうかもしれない。でも、そんなことどうでもよかった。何があっても譲れない思いがそこにはあった。
「何、この前の話ならもう、」
「やっぱり私、どうしても夢を諦めたくない。お母さんが私を心配してくれてるのも、守ろうとしてくれてるのも分かる。それはすごくありがたいことだし、嬉しい。だけどね。」
お願い。届いて。その気持ちだけだった。
「私の人生は私のものなの。それはきっとお母さんが決めるものではないし、私が決めなければいけないものなんだと思う。私は自分の人生を悔いなく生きたい。」
お願いします、と頭を下げて母の反応を待つ。視界を覆った髪の毛のせいで母がどんな表情を浮かべているのかは分からなかった。
流れた沈黙は想いの深さを物語っていた。母が息を吐く。時計の秒針

が時を刻む音がひどくゆっくりに聞こえる。
「大人になったのね、楓子。」
その声に含まれていたのは諦めではなく、少しの淋しさと安堵だった。
母は泣いているような、笑っているような、複雑な表情をしていた。
「お母さんね、ずっと不安だったの。あなたは昔から泣いてばかりいる子だったから、こんなに小さくて弱い子が一人で生きていけるのかしらってずっと思ってたわ。初めて喋った日、初めて立った日、初めて歩いた日…。あなたが成長していくのをそばで支えていられることが私の喜びだった。だから、楓子のことに口を出しすぎてることは分かっていたの。そしてそろそろ、あなたにはそれが必要ないだろうなってことも。だけど、そうせずにはいられなかった。いつも心配だったから。あなたにはなるべく涙を流すような辛い思いをさせたくなかったから。でも、駄目な母親ね。」
母がそんなことを思っているなんて全然気付かなかった。いや、多分気付こうとしなかったからだろう。私はこんなにも守られていたのに。
「ありがとう。」
零れ落ちた言葉は本心だった。私が思っていたよりも、ずっと近くに母はいた。
「お互い気を遣いすぎて思っていたことを言えなかったり、上手くいかなかったりするなんて、親子って似てほしくないことばかり似てしまうものね。」
そう言った母は少しだけ嬉しそうだった。
その日、一つの関係が溢れた涙とともに静かに終わっていった。そして、母と私の新しい親子の形が始まった。

その数日後。私はいつもの体育館の隅で、彼女を待っていた。今日で交流会は最後となる。これがラストチャンスだった。もしかしたら直は来てくれないかもしれない、そんな不安を感じていた。言ってはいけないことを言ってしまった。大切な友達を傷つけてしまった。胸の中は後悔と焦り、そして彼女への謝罪の気持ちでいっぱいだった。
三十分が経って、一時間が経った。直はもう本当に私とは会わないつもりなのかもしれないと、そう思い始めたときだった。
「楓子ちゃん。」
聞き覚えのある声に顔を上げる。私の前に立っていたのは、直のお姉ちゃんである真央さんだった。
「直ね、泣いてた。楓子ちゃんにひどいこと言っちゃったって。もう楓子ちゃんはあたしのことなんか嫌いになっちゃったかもしれないって、ここのところずっとそればっかり言ってたよ。」
申し訳なさそうに眉を下げる真央さんに慌てて首を振る。
「そうじゃないんです。あれは完全に私が悪かったし、それに、直のおかげで目が覚めました。」
そう言うと、やっと小さく笑ってくれた。確かにあのときの直の言葉は胸に刺さったけれど、それは私のために言ってくれた言葉だ。感謝こそすれ、嫌いになるなんてありえない。
「なんか楓子ちゃん、強くなったね。」
その真央さんの言葉に嬉しくなった。
「ありがとうございます。」
そう言うと、
「お礼を言うのはこっちの方だよ。直と仲良くしてくれて、本当にありがとう。直にとって楓子ちゃんは、初めてできた友達だったから。」
きっとこの家族にもいろいろあるのだろう。でも、こんなに真っすぐ直を思っている真央さんを見ていると、なんだかとても暖かい気持ちに

なる。直、あなたにもこんなに思ってくれている人がいるんだよ、と伝えたくなった。その真央さんの優しい表情を見て、いつだって幼い私の手をひいてくれた、母の暖かい掌を思い出した。

「それでね、楓子ちゃん。あたしね、頼みがあって来たんだ。」

「何ですか？私にできることなら何でもします。」

「楓子ちゃんにしかできないことだよ。あのね…」

次の瞬間、私は走り出していた。何も考えてはいなかった。ただ、行かなきゃと思った。だってきっと、あの子は私を待ってる。

直。私ね、あなたに伝えたいことがたくさんあるんだ。あのとき、ひどいことを言ってごめんね。でもね、私、直のおかげで気付いたことがあるんだ。どんなに近くにいたって相手の全てを理解することはできないけれど、お互いのことを想っている限り、心は通じ合うんだってこと。ありがとう、直。私、あなたに会えて本当によかった。

彼女は校門の脇、花壇に植えられているひまわりをじっと見つめていた。その花は、その女の子にとてもよく似ていた。

「直。」

振り向いて、彼女は笑った。そして、彼女の瞳に映る私もまた、満面の笑顔を浮かべていた。大輪の花が咲くように。

二輪のひまわりは、太陽の光を真っすぐに見つめて咲いていた。

《作品の意図》

深い愛情ゆえに娘に過度な期待をよせる母と、それに反抗心をもちつつもその期待に応えようと努力する娘の楓子。

楓子は中学三年生の夏、母に勧められて参加した特別支援学級との交流会で一人の少女直と出会う。

家族の関係と少女たちの友情について書きました。ある少女の一夏の成長記です。

《作品の寸評》

思春期から大人に向かう過程で誰もが経験する親との葛藤や逡巡が、確かな筆力で描き出された作品である。自分と母を客観的に見つめ、時には母に批判的な目を向ける主人公の姿や耳に障がいをもった少女との出会いをとおして母に思いをぶつけるまでにいたる主人公の成長の姿にはリアリティがあり、読者の共感を呼ぶ。主人公の思いや悩みが丁寧に書き込まれ、「まるで真っ白なティーシャツに一滴の墨汁を垂らされたような気分になる」などの比喩的な心理描写や、「途切れることなく返される正論に、私の心臓が握りしめられた。あまりに直接的な痛みに目頭が熱を帯びる」などの独自の表現が、光っている。

（審査員／三　輪　晶　子）